

手のひらの上

sanukisoba

「白いフィルターは口紅が目立つのよ」

彼女は僕の差し出したキャスターを手に取り、一通り眺めるとそう呟いて箱ごと僕に差し戻す。

顎を手のひらにのせ、タバコを切らした苛立ちをごまかすかのようにひとさし指で頬をトントンと叩きながら外をぼんやり眺める彼女は僕と15も年齢が違うだけあってそれなりの風格と迫力を持っていて、タバコを啜えることができずどこか不服そうな唇は、紫の色味がつよい口紅を身にまとっている。血色が悪そうに見えるこんな口紅を日常で使う人なんて、ちょっと前までは敬遠していたというのに何故か今は並んで座っている。

僕は差し戻されたキャスターを一本抜いて、何も塗っていない唇に啜えてジッポで火をつける。甘く独特な香りが漂い、彼女はそれをつまらなそうに眺める。

学生とカップルでにぎわう1月中旬の渋谷、交差点前にある喫茶店で昼過ぎに落ち合い、30分も経つ頃には彼女の赤いマルボロのボックスは空っぽになってしまった。それから10分も経っていないのに、それでも彼女はやはり面白くなさそうだ。自分の思い通りにならないことを何より嫌うその姿はとて38歳には見えないけれど、その歳だからこそ許される態度のようにも思えてくるから不思議だ。

大人としてその振る舞いはどうなのかと思う反面、自分のスタイルを貫くその姿勢はどこか格好いいと思ってしまうのはきっと僕がまだまだ子供だからなんだろう。大学を出て就職してから1年も経っていないの僕にとって彼女のような女性は魅力以外の何も持たない、そんな存在だった。

僕は煙を深く吸い込み、交差点に視線を戻している彼女の隣でゆっくりと煙を吐き出す。店に入ってから1時間ほど。僕は彼女は未だに会話という会話をしていない。

僕が就職して初めて訪れた営業先の社員が彼女だった。異業種交流なんていうおおげさなイベントなども含まれるわりには礼や掃除が中心の軍隊然とした新人研修を終えたばかりの、営業のやり方の右も左ももちろん分からないような僕は、先輩社員をつけることもなく新人ひとりで営業に向かわせる会社に不満をもちつつも商品知識を身につけてそれだけを武器になんとか乗り切ろうと考えていた。

名刺と商品パンフ、そして付け焼き刃の知識を武器に営業をかけるというのはむざむざと斬り捨てられに行くようなものだとはわかりつつも、新人にはそれ以外に取りうる手段がなかった。あれから数年経って入社当時のことを同期と振り返ってみたことがあるけれど、誰もが皆同じようなことをしていたと知り笑わずにはいられなかった。

だから、彼女に初めて会ったときも彼女の美しさや迫力に気を配る余裕はなく、新人研修で教わった通りのやり方で名刺交換を終えるなり一方的に商品紹介をまくしたて、一通りの説明が終わったときようやく彼女の顔が綺麗な部類にはいるのかもしれないということに気付けた程度だ。

これまた新人研修で習ったはずの「会話」を行うことなく馬鹿みたいにただただ話し続けていた若造が一呼吸つくまで、口を挟むのを我慢していたなんて彼女を少しよく知るようになった今では信じられないけれど、それでも実際彼女はあ那时候、不快さを表に出すこともなく黙って話を聞いていた。

「わかりました。こちらとしても検討させていただきます」

という彼女の返事を聞き、やはり知識だけじゃどうしようもないんだなと内心ため息をつきながら荷物をまとめ始めた僕に、彼女は無表情なまま「新人さんかしら」と聞いてくる。入社6ヶ月目だと答えると、ほんのちょっとだけ表情を緩ませる。これは今思い返すからこそ表情を緩めたのだとわかる程度で、当時の僕には表情を緩ませたのかどうかなんてそんなことわからない。ただ、ちょっと表情が変わったのかなというだけで彼女がずっとどこか不服そうに見えていたのが実際のところだ。やや気落ちする僕に彼女が告げる。

「知識から入ろうとするのは間違いじゃないわ。でも、袖のボタンが外れたシャツで、営業されるとそっちにしか目が向かない」

慌てて袖口を確認すると、たしかに右袖のボタンがなくなっている。

「ファッション関係の仕事なんだから、気をつけた方がいいわよ。直してあげるからちょっと待ってなさい」

そう言い残して彼女は部屋を出る。あらためて確かめてみるとボタンを縫い付けていた糸だけがそこには残っており、非常に間抜けな状態になっていた。あわせて左袖も確認すると、こちらはしっかりとボタンで留まっている。朝ボタンをつける段階では糸がほころんでいることになどまったく気付かなかった。どこかに引っ掛けたのかもしれないし、朝ただ単に寝ぼけていたのかもしれない。いずれにせよボタンはそこになかった。

彼女の言う通り、服飾関係の製品を売り歩いている僕は身だしなみに気をつけるよう毎朝のように言われている。こんなことが先輩にバレたら怒られることは間違いのないことなのだが、彼女の振る舞いというのも今となってはだいぶなめた態度だったなと思わなくもない。ただ、彼女は誰に対しても同じように愛想がないし同じように素っ気ないしゃべり方しかできない。そして思ったことと気付いたことは立場など一切わきまえず言いたいときに言う。

彼女は部屋に戻ってくると小さなボタンを僕に見せ「大体これで違和感はないでしょう。でもきつともともとついていたボタンとは違うから人前でこのシャツを脱いだりしないように」とつまらなそうに説明しながら針と糸を取り出す。「着たままでいいからこっちに手を伸ばして。手は私のいすの肘掛けにでも置いとけばラク」という指示に僕は黙って従う。

結局僕はありがとうございますとか申し訳ないですとかそのような意味の言葉を言葉にならないくらい小さい声でもごもごと言いながら、黙々とボタンを縫い付ける彼女の指先と顔を伏せた状態でも見える彼女の睫毛を交互に見ながら時がすぎるのを待った。

いたずら心でも起こしたのか、ピンクの糸でボタンが縫い付けられた白いシャツは、その後彼女と会うとき以外袖を通さない特別なものになっている。彼女がそのことに気付いているのかどうかは知らないけれど、このシャツを見るたびに彼女は「未だにそのピンク色を変えてくれる相手は見つからないのね」と呆れ顔で僕を見やる。

ピンクの糸がシャツに縫い付けられた後、2人で会うきっかけをつくったのは彼女の方だった。いつものように実りのない外回りを終えて社に戻り、僕と同じく実りのない外回りから帰ってきた先輩の説教を聞き、ため息をつきながらパソコンを立ち上げメールボックスを確認すると見慣れないアドレスから「お誘い」という件名のメール。開いてみれば差出人は彼女で、内容としては1.名刺に書いてあったアドレスに送る2.その後シャツの袖に気を配っているか3.またうちに営業に来る気はないか4.上司が真面目に話を聞きたいと言っているので長くなるかもしれないから営業に来るなら直帰する予定で来てもらいたいという要件を簡潔に伝えるだけの無骨なものだった。文面もとても女性のものとは思えない。落ち着いて考えればタイトルだってビジネスとして許されるのかという点で疑問だ。

僕は特にノルマのある環境で働いているわけでもないし、営業成績が昇進に直結する環境にいるわけでもないけれど、もしかしたら脈があるかもしれないという相手先をみすみす逃すようなことはしたくなかった。故に一も二もなく僕は彼女のお誘いにのった。11月も始まったばかり。契約につながれば初めての営業成功事例になるし、同期たちもどうしていいのかわからず右往左往しているこの時期に契約が取れば僕はきっと自分に少しは自信が持てるようになる。なんとかして契約にこじつきたいと思いつつも、どうやったら契約がとれるかなんて誰にも教わったことがないしそもそも契約を取ったことがない自分んはどんなに気負っても何もしようがない。結局高いところから落とされる鉄球のように身を委ねて着地を待つしかないのだ。その着地点がどうなるかですべてが決まる。

何をどうしたらいいかわからない僕には、商品知識をもう一度確認し、打ち合わせの日時を確認し、想定される質問を検討し、見積もりのようなものを作成すること以外にできることはなかった。順番を変えたり、かける時間を変えたりしながら、僕はこれらの作業を繰り返して当日を待った。もちろん、その間も他の営業先に働きかけにいたりしたけれど、どうしてかそれらのことはあまり覚えていない。入社してから帰るまで、彼女の営業先のことばかり考えていた気がする。

そしてその日はあっという間にくる。

言われたとおり指定の場所に約束の時間に着くと、彼女と、彼女よりだいぶ落ち着いた感じの女性が僕を待っていた。この期に及んでも絶対先輩とツーマンセルにしない自分の会社に疑問を持ちつつ、新人営業で相手が2人、入社8ヶ月目の僕にこんな状況をまかせることはおかしい、などと不満を抱いていた。入社して10ヶ月も経つ今となっては、新人が複数相手に営業かけるなんて珍しくも何ともないけれど、知っている世界が狭いとああいうおこがましさを身につけてしまうのだろう。

なんののんのって、数ヶ月も営業をすることで少しずつやり方に慣れてきた僕は商品知識以外にも色々と提案できるものもあったし常に今日のこの日を思い描いていただけのことはあって、前回の訪問よりはよほどまともな営業ができた。実際先方はそこそこ気に入ってくれたらしく正式な見積書を要求してきたくらいだ。

営業は1時間くらいで終了したのだが、その後30分くらいは雑談に費やされた。「雑談も営業のうちだ」などと先輩に言われてはいたし、それを否定する気もなかったので僕は普通に応じていたのだが、多分向こうも暇か退屈を持て余して、いいタイミングで手頃な新人が飛び込んできたからちょっと暇つぶしに使おうとでも思ったのではないかなと疑ってはいる。その証拠に会話は常に向こうがリードしていて、しかもその内容が僕に対する質問に終始していた。会話というよりは尋問と言った方が正解。

脈絡のない話をし、なんで今の会社に入ったのか、今の会社はどうか一別に会社に報告したりしないから素直に言えばいいのよ—などと彼女と、名刺交換で上司だと知った彼女の上司に質問を浴びせかけられる。それは僕にとってもなかなか面白い経験であったし、こうして時間をつぶせるのならばこんなにラクな仕事はないかもしれないなというくらいに気を使わないですむ雑談でもあった。いや気を使わないですむなんて勘違いしてしまうから僕は営業がうまくないのかもしれないけれど。

彼女の上司に緊急の電話が入り、営業とも雑談ともつかないものが終わったのは19時を回った頃だった。「失礼します」と彼女の上司が席を立ち、僕が営業用の書類なんかを鞆にしまっていると「この前のボタン縫い付けの料金代わりに今からご飯食べにいきましょう」と彼女が一方的に宣言する。そういえばお礼をまだしっかりとしていなかったと自分の失敗に焦っていると追い込むように彼女が「本来なら私の裁縫はお金をとれるんだからね。コーヒー奢ってくればいからご飯食べにいきましょう」と続ける。

それにしても、社外の、それも営業に回ってきた社員を食事に誘うというのは一般的なのだろうか。まして女性社員が男性社員を誘うというのは。いや、そういう考え方はジェンダーかもしれないけれどジェンダーは社外の者との関係においてどれだけ配慮すべきなのかなどと考えつつも、何故この人は急にこんなことを言い出したのか、2人で食事なのか他の人もくるのかなどと内心でクエスチョンマークをせっせと生産しながら矢継ぎ早に出される彼女の指示を僕は必死に記憶する。

「このビルのはす向かいにあるドトールの横の細い道を2ブロック進み、タバコ屋の角を左折、そのまままっすぐ進むと赤い看板の喫茶店があるからそこで待っていて。喫茶店だけどわりとしっかりした料理を出せるからそこでいいでしょう」

僕はそれに従わざるを得なかった。質問するタイミングを逸してしまったし、なにより質問することを許されているとも思えなかった。僕はただただ彼女の指示に従い動けばそれでよいと彼女が思っていることは頭ではなく身体が理解していた。営業の誘いを受けた時点から既に僕は今日のこの日に彼女に逆らえなくなっていたのだ。

建物を出てから一切迷うことなく僕はその喫茶店に着くことができた。思ったよりも店がわかりやすかったというのもあるが、彼女の簡潔な指示は的確と呼ぶ以外にないものだった。店自体はよくある喫茶店というか、誰がどう見ても喫茶店だろうという国内、少なくとも都内における喫茶店の標準文法を厳格にトレースしたようなもの。入り口の前にはこの時間でもまだランチタイムの看板が出ていたのでおおらかな店なんだなと思ってはいたが、店内に入ってからランチタイムは閉店までということがわかり予想よりもずっとおおらかな店だということを知った。

「待ち合わせで、相手が1人遅れてきます」と告げて席につき、店員の運んできた水とメニューを前に暇を持て余しながら彼女を待つ。駅前にあるようなコーヒーチェーン店よりは色気があるけれど、洋食店よりは色気のない店内に装飾品の類はなく、ドアのあたりにある観葉植物がかろうじて飾りといえるかどうかというあたり。壁には絵の一枚もかかっておらず、そしてもちろん定食屋ではないので壁にメニューがぶら下がっているということもない。文字通り壁には何もかかっていなかった。絵が描いてあるわけでもなく、ともすれば殺風景と言わざるを得ないような店内を見回しているとドアの開く音がして彼女が顔をのぞかせる。馴染みなのか店員に気さくに挨拶をして彼女は僕のいるテーブルまでまっすぐにやってきた。

「わかったみたいね。迷わなかったでしょう」席に着くなり彼女はそう言う。僕が口を開こうとすると「注文は私に任せておきなさい」と一方的に告げて店員を呼ぶ。彼女は僕に答えなど期待していなかったのだ。疑問ではなく宣言。彼女は自分にトーストとサラダを注文し、僕にはチキンソテーを注文した。たとえ僕が鶏肉嫌悪主義者であったとしても彼女はきっと注文を覆さなかっただろう。彼女にはそんな強さというか、固さがある。そうでなければ彼女のような振る舞いはできないだろう。

注文したものが出てくるまでの間、彼女は珍しく口数が多かった。やれ新人はどんな気分だ、だのやれどんな仕事をしているのだ、だの。彼女をもう少し知るようになってから振り返って見たときに気付いたのだが、このときの彼女は僕と知り合ってから3番目以内には入るくらい饒舌であったし、それでいて僕の感想を聞く質問はしてきても僕自身のことについては何も質問をしていなかった。料理が出てくるまでの間、僕は彼女の質問に答え続けた。時間にしてどれくらいだったのだろうか。少し疲れたな、と思い始めたあたりで店員がやってくる。

食べている間、彼女はあまり話さなかった。もちろんこのときは知らなかったのだが、これは彼女の癖で、食事時は極端に口数が減るのだ。ただでさえ口数の少ない人なのに、それでいてさらに口数が減ったりするのだから食事に不満があるんじゃないか、機嫌が悪いんじゃないかと誤解する人は多いだろう。でも実際はそうじゃなく、ただ単純に彼女はものを食べながら会話をすることにあまり楽しみを見出せないだけなのだ。

出てきた料理は確かにしっかりしていた。喫茶店なのか、洋食屋がコーヒーに凝り出したのかどちらともつかない店。彼女の言うとおりのチキンソテーは喫茶店のものとは思えないくらいに美味しかったし、そえられていたパンもしっかりとしたもので僕はそこそこ驚いた。驚きが伝わったのか、僕が食べ終わる頃、既にサラダを食べ終えトーストの残りにとりかかっていた彼女は、ちらりと僕に視線を向け「美味しいでしょう」と無表情に言った。

大した会話をすることもなく食事を終えた2人のもとにコーヒーが届けられ、少々の気まずさを感じながらカップに手を伸ばしたところで彼女が口を開く。

「さて」

「あ、ボタン、この前はありがとうございました」

「そんなのもうどうでもいいのよ。で、美味しかったでしょう」

「美味しかったです。喫茶店とは思えないですね」とこたえながらも、ボタンの礼ということで食事に誘われたのじゃなかったのか、と若干の疑問を覚える。これも彼女の気まぐれさのあらわれなのだろうか、などと。

「それがわかってもらえれば紹介したかいがあるわね」

彼女はさほど満足した素振りも見せずコーヒーを口に運ぶ。つられるようにして僕もコーヒーを飲む。

「念のために言っておくけど、袖の部分だけピンクの糸でボタンを縫い付けたシャツなんて着てたら変な人と見られるか、常識知らずと思われるかのどっちかだからね」

「あ、はい。まあ」じゃあ何故あなたはピンクの糸で縫い付けたんですか、などとはとてもじゃないが僕には聞けない。

「袖口のボタンなんてあまり見られないけど、女性は結構見てるからピンクの糸で縫い付けたシャツなんて見つかったら『どんな女性かしら』と噂になっちゃうよ」

「気をつけます」

「気をつけるくらいならボタンを自分でつけられるように練習しなよ」

会話の流れがよくわからなくなってきた僕は、話題を切り替えようと思っていた。これではまるで酔っ払いに絡まれているような具合である。いや、聞きたいことは色々ある。なぜピンク色の糸を使ったのか。なぜ今日は食事に誘われたのかなどなど。いつまでも受け身でいるのもつらいので僕は自分から聞いてみることにする。一大決心だ。

「ところで」

「ところで、タバコ吸っていいよね」

勇気を出して切り出そうとした話題は彼女の疑問形の宣告で立ち消えになり、結局もとのように彼女のペースに戻ってしまう。この場の支配者は彼女で、彼女の思わぬ方向へ移行することはきっと許されないのだろう。おぼろげながらにそんなことを実感として理解し始めていた。

ロンソンのバンジョーで火をつけた彼女は、美味しくもなさそうに煙を吸う。煙を吸い込み吐き出すという行為を3回ほど繰り返す、長くなった灰の部分の部分を灰皿に落とす。人差し指と中指で挟んでいたタバコをくるりとまわすようにして親指と中指ではさみ、人差し指でタバコをトントンと叩くと灰は飛び散ることなく綺麗に灰皿におさまった。そしてまたくるりとまわすようにして元通りの場所にタバコは戻る。

「ところで、何を話そうとしていたの」

タバコを啜る直前、腕の動きを止めて彼女が尋ねる。尋ね終わると予定通りタバコを啜え、煙を吐き出す。少なくとも僕の発した言葉を彼女はちゃんと聞いていたことがわかり、じゃあ彼女は意図的に僕を無視したのか、だとしたらなぜか、などと考え始め若干の混乱が生じる。

「いや、あの……」

少し口ごもり、沈黙につながりそうだと思った矢先、灰を灰皿に落としながらこちらを見ることもなく「続けて」と冷たく彼女が宣告する。これはお願いではなく、命令だとも言いたげな声音で。彼女の視線の先はタバコから動くことはなかった。

「いや、なんで今日はこんな風に誘われたのか、それがよくわからなくて」

不思議な生物を見るように彼女は僕を眺め、タバコの煙を胸いっぱい吸い込み、名残惜しそうに時間をかけて吐き出してから、タバコを挟んだ人差し指と中指で僕を指差しながら「どういう理由だったら嬉しい」と尋ねてくる。そんな質問をされても答えられるわけがない。

「選択肢をあげよう。1. 私が君を男性として気に入った2. 私が君を人として気に入った3. 私が1人でご飯を食べるのが嫌だった。さあ、どれだ」

彼女はそう言いながら灰を落とす。灰皿に落ちた灰の端っこが風に舞って灰皿から飛び出す。彼女は相変わらず無表情なまま。回答に5分くらい悩み、その間も彼女はせかすでもなく淡々と2本目のタバコに火をつけただけだった。

「1人でご飯を食べるのが嫌だったのは一番想像しづらいですけど、他のも想像できません」

やっとひねり出した答えを言うと、僕の後方の天井のあたりを見ていた彼女は、初めて僕の存在に気付いたかのように僕の目を見て「センスは悪くないみたいだね」とだけ言ってタバコを消した。

タバコを消し、まっすぐ僕目を捉えたまま「君には2回目に進める権利を与えよう」と彼女は言った。それだけは覚えている。けれど、その後どういう会話をしたかは覚えていない。もしかすると会話なんてしていないのかもしれない。

僕はどうやって駅に向かったのかすら覚えていないのだ。

彼女の言った「2回目」の意味が分かったのは年末だった。クリスマスまであと2週間を切っただこか皆が浮かれ気分の季節に彼女から会社に電話が入った。珍しく外回りに出ておらず電話を取ることができた僕に挨拶もなく、ただ日時と場所を一方的に告げて彼女は電話を切った。

電話を切られた直後は何が起こったのかわからず呆然としていたが、告げられた場所から判断する限りこれは仕事の話ではなくこの前と同じようなご飯の誘いかなにかなのだろうと理解することにして、ぼくは手帳に予定を書き込んだ。例のシャツを着ていこうと決めたのはこのときだった。今でもとってあるあの手帳のあのページには「ピンクのシャツ」と書いてあるはずだ。

僕はこのとき彼女との食事を楽しみにしていたのだろうか。それは今でもたまに考える。楽しみにしていたのか、彼女の不思議な雰囲気にあたって好奇心の固まりになっていたのか。理由はともかく、彼女と接することに何かしら特別な感情は抱いていた。今まで僕が出会った人の中にはいなかったタイプ。ただそれだけの理由で、20ちょっとの僕を惹き付けるには充分だ。

約束の日にあのシャツを着ていくことに決め、そのシャツに一番合うスーツをその日に着けるようその週のスーツのローテーションを組み替え、ピンクの縫い糸に合うネクタイまで用意

してその日に臨んだことを考えれば僕は相当浮かれていたのだろう。職場でも「最近機嫌いいね」などとからかわれたくらいだからそれはあの日会った彼女にも伝わっていただろう。彼女はそんなことに気付いている素振りも見せなかったけれど。問題は、彼女の場合本当に気付いていない場合も考えられるということで、そのことも考えるとこのあたりのはんだんはとても難しい。

浮かれ気分で迎えた彼女との2回目の食事は、彼女の希望で新宿のイタリアン。新宿でイタリアン、しかも味がまともな店というのはそうそうあるものではない。けれど彼女はそんな数少ない店を知っていた。彼女は食べることに限っては人並みはずれて膨大な知識を有している。

例によって黙々と2人は料理を片付け、食後のコーヒーを待つ。僕も前回の時点で食事時の沈黙には慣れていたので、気を使うこともなく食べることに専念した。ピザとパスタを取り分けるときに言葉は交わしたけれど、それくらいだ。美味しいね、も、美味しくないね、も言わず。まあ、料理はとても美味しかったので美味しくないねなんて言うことは絶対になかったのだけれど、過程のお話。そして今回はコーヒーではなくてエスプレッソとカプチーノという違いはあるけれど、前回と同じような塩梅。

「さて」

と彼女が切り出す。

「さて」

と僕が返す。

口元にマルボロを運ぶ手を止め、火をつけようと伏せ気味だった顔を持ち上げて彼女がこちらを見る。僕は彼女の視線を正面から受け止める。そんな僕を見て、タバコをくわえ、ライターの花をつけながらニヤリと笑う。

「なかなかいいね。気に入ったよ」

タバコを唇の端に咥えながらそう言うとタバコに火をつけ、煙を吐き出しながら煙の先を目で追う。僕は何も言い返せない。頑張ってみたところで所詮はその程度だ。勢いなんて一瞬でなくなってしまう。昔からそうだった。喧嘩を売るときは威勢がいいのに、啖呵を切った後すぐにビビって尻込んでしまうタイプだ。高校生じゃあるまいし、と自分が情けなくなる。

とくに返す言葉もなく彼女がタバコを吸う姿を観察していると彼女が口を開く。いつものように灰皿に灰を落としながら。

「その若さで私と渡り合おうとするその心意気が素敵だよ」

「貴方とそんなに歳が離れてるとは思いませんけれど……」

間髪を入れず答えてしまう。先ほどまでの情けないと思っていた自分はどこへ行ったのか不思議になるくらい僕は落ち着いて物事を考えることができない。反射で答えてしまっている。またしても反省を始めそうになったが今回は違った。彼女がテンポよく返してきた。

「38」

「え」

「私は38歳。君が何回滑って何回ダブったか知らないけれど、最高でも16歳は離れてるんじゃないの」

僕は驚いて言葉が出てこなかった。せいぜい28、9だと踏んでいた彼女は実は40近くだった。今

でも彼女は年齢について嘘をついているのではないかと思うときがある。一回り以上も歳が離れているなんて信じたくないだけなのかもしれないけれど、それと同じくらいに僕は彼女の年齢なんてどうでもいいと思ってはいる。たとえ彼女が50だろうが10だろうが、彼女が今のような魅力を持っている限り。それでも、ショックなものはショックだ。いや、ショックというよりは驚愕と言った方が適切だ。

「結構ショック受けてるみたいね。若く見えてたのか、もっと老けてると思ってたのかは聞かないでおくけど」

「20代後半だと思ってました」

やっとひねり出したその一言を聞くと彼女は鼻で笑う。世辞はいいのよ、と。聞かないでおくけどと言ったでしょ、と。

彼女の実年齢に対する純粋な驚きと、40間際の女性に夢中になりつつある自分への戸惑いと、そんな僕を見て面白そうにしている彼女の視線と、色々なものがいっぺんに押し寄せてきて僕は何をどうしたらよいかわからぬまま、つまらない会話をしていた気がする。そう、僕は彼女に夢中になっていたのだ。彼女の年齢を聞き、初めて実感として僕はそのことに思い至った。僕は彼女に恋をしている。20前半の男が一回り以上離れた女性に恋をするのは普通なのかと考え始めたときに僕は自分の気持ちに気付いたのだ。あまりにも鈍いではないか。

その店を出たのはそれから30分くらいしてからだろうか。駅に向かう道では特に会話もなかったけれど、それでもいつもより口数が多かった彼女は「次は君が場所と時間を決めなさい。土曜日はいつもあいてるから」と告げてから改札をくぐっていった。

僕は何も返すことができず、駅の向こうに消えていく彼女の後ろ姿をずっと見ていた。

改札での彼女の命令を守った結果が、渋谷の喫茶店である。あれから二週間も待てず僕は彼女を誘い出していたし、誘うメールを送ったときの彼女の返事は「誘いが遅い」というものだった。彼女のこうした不満とも文句ともつかない言葉は、照れ隠しと本音が半々で混じったものだとわかるのはこれもまた当分先の話だ。

渋谷の雑踏を見下ろしながら彼女は空になった赤マルの箱をもてあそぶ。右手でくるくると箱をまわし、左手に渡す。左手で箱をひっくり返したり戻したり。両手で箱の両脇をつかみ人差し指と中指で器用に回転させたり。彼女は手の中で空の箱を器用に操る。視線を雑踏に置いたまま。そんな彼女を眺めながら僕は今日4本目のタバコに火をつける。キャスターの甘い香りが広がる。

煙を吸い、そして吐き出すという動作を僕が4回ほど繰り返したとき、タバコがないことに我慢できなくなった彼女が「タバコ買いに行こう」と提案ではなく命令を下す。僕はタバコをそのままみ消し、喫茶店に1時間ほどの滞在実績を残して店を出る。先ほどまで眺めていた交差点を横切り、最初に目についた手頃なコンビニに入って彼女はタバコを2箱買う。彼女はタバコを買うときいつも決まって2箱買う。1箱だけ買うということはない。

コンビニの前で彼女を待つあいだ人波を眺めていた僕は、肩をつつかれるまで店から出てきた彼女に気付かなかった。「可愛い子でも眺めてるの」と言いながらおまけでもらったらしい使い捨てライターを僕に渡す。「要らないからあげるよ」と。ありがたく僕は受け取る。ズボラな僕はジッポのオイルを入れ忘れることが多く、ガスライターも合わせて持ち歩く癖があることを彼女は知っているのだ。そうでなければ、要らないものは要らないとその場で断っている彼女がライターをもらってくるわけがない。

彼女と会っているときの会話はあまり多くない。彼女が多弁ではないということもあるだろうし、僕が気の利かない男だということもあるのだろうけれど、一般的な男女の組み合わせと比較しても極端に会話は少ないと思う。そして、駅に向かうときであっても2人で歩いているときは大抵は無言で盛り上がりもなく淡々と彼女について歩くだけの状態なのに、駅に向かうという目的もなくただただ彼女の気の赴くままに歩く後ろを追いかけているだけではますます会話もなくなるというものである。

僕は彼女の斜め後ろをただただ黙々とついて歩く。タバコが吸いたいからタバコを買いに店を出たはずなのに、購入した今となっても彼女は一向にタバコを吸おうとする素振りを見せない。彼女はどこへむかっているのか。気付けば僕らは代々木公園まで歩いてきてしまっていた。

目についたベンチに彼女は唐突に腰掛ける。あたかも数年前から今日のこの日にこのベンチに座ることを予定していたかのように「当然でしょ」とでも言いたげに腰掛ける。

「座れば」

と言われ彼女の隣に腰掛ける。公園内なのでタバコは吸えないなとあたりを見回すと、土曜日だというのに人は少なかった。さすがに寒くなってくると公園は出足が鈍るのだろうけれど、こんなにも人の少ない代々木公園に来たのは初めての経験だった。

「さて」

彼女が言う。もちろん僕は「さて」と応える。

「私は君が気に入ったわけだけど、君はどうだろう」

どうだろう、とはどういう意味なのか僕にはよくわからなかった。僕自身は彼女に魅力を感じていたし、彼女が恋人になったら素敵だろうなとも思ったこともあるけれど、彼女とこうして2人で会えるだけで満足してしまうくらい彼女を高嶺の花みたいに思っていた。自分に自信がないわけじゃないが、それでも僕みたいなガキを彼女が相手するとは思えなかった。なにより年齢が違いすぎる。

「質問にはさっさと答えないと損するよ」

彼女が急かす。

「私は私が気になったから聞いているの。それに答えが返ってこないってのはどんな質問でも我慢ならないのよね」

「いや、あの、どういう意味の質問かよくわからないんですけど」

「どういう意味、って、そのままよ。あなたは私のことを気に入ってるのか気に入っていないのか」

「いや、気に入ってるというか、気に入ってなかったらこうやって会ったりはしないというか」

ここまで答えたところで彼女は不思議そうな顔になり、僕の顔を覗き込むように顔を近づけてくる。

「君、あんまりモテないでしょ。なんとなくわかってたけど」

え、とか、あ、とか、声にならない文字をいくつか発した僕をみて、かぶせるように彼女は続ける。

「あのね、気に入ったか気に入ってないかってのは要するに好きか嫌いかって話を今してるの。君は私を好きか嫌いか答えればいいの。もちろん大人の意味での好き嫌い。今日が3回目くらいのデートなんだから今後の方向性を決めるにはいいタイミングなんじゃないの？最近の子はそういうことを大学で学んでこないのかしら」

彼女は顔色一つかえずに言う。こういうとき、経験を積んだ人というのは強い。この場合経験というのは歳と同義だ。彼女に比して経験値のあまりに低い僕はこういうとき勝ち目がない。僕は一気に緊張を高めてしまう。

生まれて初めて告白をしたとき、僕はまだ中学生だった。そのときどれだけ自分が緊張していたか。好きです、付き合ってくださいというたったそれだけの言葉を口にした瞬間、音がだんだんと遠ざかり、視界が白く光り始め、誰かに思いっきり殴られているかのように心臓の鼓動を強く感じた。耳の中に心臓が放り込まれたかのように鼓動の音を耳で感じた。あれはもう10年も前の出来事だけど、僕はあのときと同じくらいの緊張を味わっていた。生まれてこの方女性に告白されることなんてなかったから当然かもしれないが、初めての経験だということをさっ引いてもこんなに緊張するのはおかしいのじゃないか。興奮と驚きでドキドキする反面、冷静な自分が自分を分析していて、その温度差がまた平静さを失わせていく。

「生意気なことは言えてもまだまだ子供だな」

彼女はベンチから立ち上がり、デニムの尻についた土を手で払うような仕草をすると僕に向かって右手を差し出す。

「私と付き合うならこの手をとってついておいで。付き合わないならそのまま立ち上がるといよいよ」

上に向いた手のひらを見て、僕は彼女の手のひらの上で踊っているだけの存在だな、と自嘲する。出会ったときから彼女の手のひらの上にしかいなかったのだ。

僕は彼女の右手に自分の右手を重ね、彼女に引きずられるようにして歩き始める。すべては彼女が定め、彼女の言うままに僕は動く。

「そのシャツは人前で脱がないようにって言ったよね。さて、私の命令に背く勇氣はあるかしら。今日、これから。どうする」

彼女が意地悪そうに笑いながら言う。